

図書館の住人になって一ヶ月ほどが過ぎた。館長室の大きな窓からは、学生たちが楽器を吹いて練習する姿が間近に見える。カウンターに行くと、本や楽譜を借り出す先生方のお顔もわかる。これまでのたんなる利用者とは違った視点であり、私にとっては新鮮だ。それに加えて、図書館はかなりの予算を消化する部署でもあり、円滑な運営を行うだけではなく、そのために必要な予算執行のための決済印を押すことも重要な仕事であることがわかってきた。外から見ていた時と比べて仕事の多様さに驚く毎日である。

私の図書館の活用を振り返ると、大学生の頃はレポートを作成するための資料探しが大半であったが、大学院生からは学術雑誌に自分の研究と関連するものが載っていないかどうかの確認作業や新しい実験に向けた論文検索に変わった。もちろん、冷暖房が効いてソファもある静かな場所であるから昼寝にもってこいの場所でも、かなりお世話になったことも事実である。裏では利用者第一の運営を旨指して努力や工夫がなされていたのに、たんに休息の場所として使っていた自分を恥じ入るばかりだ。

大学院生の頃、図書館で短期アルバイトの募集があった。製本した雑誌の整理や移動が仕事内容ということで気楽に応募したのだが、実際にはフランス語やロシア語の雑誌の名称すら読めず我が身の無知を知り、書棚の位置を移動するだけであるのに体力のなさを痛感して終わった数日であった。本は深く、そして重い。図書館というところは一筋縄ではいかない場所である。

図書館はみなさんが来るのを待っている。音楽を聴きに、本を読み、資料を探しに、そして少しの休息を求めて訪れてほしい。その後でまた少し先を見つめながら学内に散っていくみなさんの姿を、館長室の窓から眺めていよう。

Fresh 2011

この春、図書館のスタッフに加わった新メンバーの自己紹介です。どうぞよろしくお願いします。

この4月1日より国立音楽大学附属図書館の職員となった柄田(つかだ)明美です。

私はこの3月まで民間のシンクタンクに勤務し、文化政策、芸術家の支援制度、劇場やホールの運営など、芸術文化を専門とする調査研究に携わってきました。そうした長年の仕事の中で私が心から実感していることがあります。それは、芸術は私たちの心豊かな生活になくてはならないものということです。中でも音楽は、直接人の心に届き、ある時は人を癒し、ある時は人に寄り添い、ある時は人を勇気づける素晴らしい力を持っています。

そういった思いから、この国立音楽大学を職場とし、音楽を愛するみなさんの研究や音楽活動を図書館から支えることができることをとてもうれしく思っています。

私も音楽のこと、音楽資料や情報のこと、大学のことなど、勉強しなければならないことが山積みですが、早くみなさんのお力になれるようがんばります。どうぞよろしくお願いします。

趣味はウォーキング(というか、散歩)。緑濃い玉川上水沿いを歩くのを楽しみにしています。

♪♪♪ 柄田 明美 (つかだ あけみ) ♪♪♪